

## シニカルな批評の魔法使い

許 培 寛

誰でも名波先生を平凡な方と評価することはできないと思う。特に外国人留学生にとってはそうであろう。大学を卒業して筑波大学の研究生として日本に渡った僕の最初の指導教官は日本中世文学（連歌）を専攻していた奥野純一という先生であった。その先生が僕が地域研究科修士一年であったある日突然、「君、名波君の授業をとってみないか」と勧めたことがある。それが名波先生と僕の出会いのきっかけになった。

名波先生の授業で僕は留学生にはすこしく難しいテーマである「平家物語」の世界に接することができた。当時の僕にとっては「平家文学」の奥深い世界は理解しにくい点があった。とにかくそれまでのことであつたとしたら、名波先生と僕はそれまでの縁で終わったはずであつた。

修士一年の秋のある日、奥野先生は僕に「君にはすまないが、僕はふるさとの大学に移ることになった」とおっしゃった。ちなみに、奥野先生は現在三重県伊勢市の皇学館大学で御活躍中である。

当時の地域研究科には平岡敏夫という近代文学専攻の先生がいらっしゃった。平岡先生はこうして僕の二番目の指導教官になった。平岡先生は著書執筆や講演などで忙しくしていられた方だったが、僕は平岡先生の下で日本近代文学に専攻を変え、「北村透谷」という作家の研究を始めた。

「不運は重なる」ということわざがあるように、平岡先生は退官前に他の大学の学長として移られることとなった。これが名波先生と僕が深い縁を結ぶ決定的なきっかけになった。

文芸言語研究科の一般文学・比較文学専攻の編入試験を受ける前に僕は名波先生を伺った。名波先生は僕の事情を聞いたあと、「僕が応援するから、がんばってよ」と簡単におっしゃった。おかげで僕は文芸言語研究科の一般文学・比較文学専攻に編入することができ、中世文学を専攻される指導教官を持つ近代文学専攻というねじれた関係の学生になった。

名波先生は以前僕があつた日本人の先生とは若干違う先生であつた。それまでの日本人の先生はそんなに距離を置くわけではなかったが、さりとてそんなに情熱的でもなかった。しかし名波先生は学生との間に距離を置かなかつた。このような名波先生の個性はもう一人の指導教官の荒木先生とは対照的であつたことも事実であ

ろう。しかし、二人の先生の学生に対する指導方針は微妙に調和していたと僕は思う。こうして批判的で情熱的な指導方針のお陰で、名波先生の下には外国人留学生が大勢集まることになった。

先生は学生指導のために授業以外に「勉強会」をもうけ、学生に論文指導を行った。以前、論文作成に苦しんでいた留学生達はその「勉強会」で一生懸命に論文作成に取り組むことができたし、大いに成果をあげたと僕は確信している。

また「名波勉強会」に起きたもうひとつの変化は、ある時期から留学生だけでなく、日本人学生が加わるようになったことである。日本人学生の参加によって「勉強会」はより一層活性化するようになったと僕は思う。ある時は「勉強会」で発表の時間が長くなって、弁当をたべながら発表を続けた記憶がいまでも残っている。振りかえって見ると、その時が僕にとっては日本での一番楽しい時間であったように思われる。「勉強会」で一生懸命に意見をかわしたメンバーたちは今も日本と韓国、中国、台湾の各地で互いに協力して研究を続けている。

実際に僕は名波先生の指導学生の中で一番不勉強な学生であった。しかし、僕が不勉強であるのにもかかわらず、先生は僕に深い関心を持ってくださった。

先生のお陰で、僕は韓国の大学で日本文学を教えている。今学期は名波先生の学部授業で習った『竹取物語』について講義をした。

僕は今の自身に、名波先生が学生に対してもっていらっしゃったような「情熱」があるのかと問いかけることがある。僕はただ名波先生のようになるために努力しているだけである。

僕には三人の指導教官がいらっしゃったが、名波先生は僕の唯一の指導教官である。